第107回 常設展示

流行語あれこれ
―時代を映す言葉たち―

平成12年2月28日～4月21日

みなさんは「流行語」というとどんな言葉を思い浮かべるでしょうか。

次々と新しい言葉が生まれる中で、時として人々の圧倒的な支持を受け、爆発的な勢いで広まる言葉、それが「流行語」です。テレビの普及以降、流行語になるべく、実に多くの言葉が生まれました。しかし、流行語となるには、その流行の担い手となる大衆の社会的な共感を得なければなりません。「流行語は送り手と受け手となる人々の合作である。」といわれるゆえんです。

今回の展示では、流行語の世界を当館の資料からご紹介します。その言葉の発生と流行、意味の変化による言葉の一人歩きといった興味深い様子をご覧下さい。

展示資料一覧

<>内は当館請求記号

◆流行語とはどんな語なのでしょうか。まず始めに流行語の概念について展示いたします。

流行語とは？

１．国文学　解釈と教材の研究

学灯社［編］　学灯社　42巻14号通号621号　1997(平9)　<Z13-334>

流行語特集号。流行語についてさまざまな角度から研究されている。流行語の定義についての一説。

２．世紀末死語事典

加藤主税［著］　中央公論社　1997(平9)　<KF91-G48>

流行語は、その流行期間が過ぎると「死語」になることが多い。そのため「死語」を集めたものには、かつての流行語が数多く見られる。また、ごく少数ではあるものの、「死語」が復活して流行するケースもある。

３．若者ことば辞典

米川明彦［著］　東京堂　1997(平9)　<KF116-G5>

流行語の定義は様々。中には狭い地域の限られた人たちの間で流行している言葉もある。「若者ことば」もそのひとつ。特徴は、略して短くした語が多いこと。近年、その記号化、暗号化が進み、説明がなければ、全くわからない言葉も多い。こうした難解な言葉を使用することで、互いの仲間意識を深めているという見方もある。

◆次に実際の流行語について、その発生と流行の過程を個別に見ていきたいと思います。
言葉の意味やイメージが変化して流行していく様子も興味深いものです。

明治大正期

〇血税

４．徴兵告諭

白野夏雲［講訳］　二葉堂　1874(明7)　<YDM51125>

明治５年公布の徴兵告諭を講読(解説)したもの。同書中の「血税」はフランス語の「兵役の義務」を直訳したものだったが、本当に血を絞り取られるという流言が広まり、各地で「血税一揆」と呼ばれる暴動が起きた。

５．明治大正の新語・流行語

槌田満文［著］　角川書店　1983(昭58)　<GB415-73>

「血税」という言葉が引き起こした騒動のありさまがうかがえる。

６．週刊ポスト

小学館［編］　小学館　30巻52号通巻1467号　1998(平10)　<Z24-190>

現在一般的な「血税」という語の使用例。徴兵制の意味合いは完全になくなっている。

〇ハイカラ

７．当世ハイカラ競

ベネディックス原著　登張竹風・橋本青雨［共訳］金港堂　1905(明38)

<YDM101244>

「ハイカラ」は明治後半から大正初期にかけて多用された流行語。もともとは「ハイ・カラー」で、洋行帰りの若い政治家や官吏たちが当時アメリカで流行していた高襟の洋服を好んで着用したことから、彼らの呼称として使われた。

８．当世ハイカラ気質

花の本詩庵［著］　文禄堂　1902(明35)　<YDM94669>

ところが、「ハイカラ」はすぐに「西洋かぶれの気障なやつ」というような侮蔑の言葉として使われるようになる。この資料のように「吹けば飛ぶようなやつ」という意味で「灰殻」と当て字されたりもした。

９．ハイカラ婦人　洋行土産珍聞奇観

山崎弥栄［著］　広文堂書店　1905(明38)　<特274-618>

「ハイカラ」はその数年後、それまでの主に男性をさす言葉から、男女を問わず「洋風を好む、おしゃれなひと」のような好いイメージの言葉として使われ始め、その利用頻度も急激に増加した。

10．週刊少女フレンド　「はいからさんが通る」

講談社［編］　講談社　13巻9号通巻647号　1975(昭50)　<Z32-410>

テレビアニメにもなった人気漫画。この影響で「ハイカラ」といえば女性をさす言葉と思う人も多いはず。

〇文化

11．文化中心家事新教授法

石沢吉磨［著］　教育研究会　1923(大12)　<263.7-106>

大正時代に入ると「文化」という言葉が広く使用されるようになる。もともとは「文明化する」ということの略語。

12. 文化食品つくり方

笹井孤星［著］　帝国飲食料新聞社　1925(大14)　<特107-809>

流行語はその流行過程で多くの造語を生むことがある。「文化」はその好例で、その名が付されたものが数多く現れた。「文化食品」「文化住宅」「文化包丁」「文化おむつ」のようにかなり庶民レベルのものにまで及んだ。

13. 文化住宅図案百種／上巻

能瀬久一郎［著］　文化住宅研究会　1926(大15)　<552-50>

昭和期(戦前・戦中)

〇モダン
〇ガール

14. 昭和世相流行語辞典　ことば昭和史

鷹橋信夫［著］　旺文社　1986(昭61)　<GB511-209>

昭和に入り一躍、大流行したのが「モダン」である。有名な「モガ・モボ」(モダンガール／ボーイ)から「モダン語」「モダン生活」「モダンワルツ」など多くの派生語を生み出した。

15. 日本流行歌史／上

古茂田信男　他［編］　社会思想社　1994(平6)　<KD841-E1204>

昭和5年の流行歌「洒落男」の歌詞。当時、地方にまで広まったモボの基本的なスタイルがうかがえる。なおモボ・モガの語には不良青年というニュアンスがあり、そのイメージは決して好いものではなかった。

16. モダンガール

清沢洌［著］　金星堂　1926(大15)　<536-270>

モガに代表されるようにガールという語も同時期多用された。昭和期に入ると女性の社会進出が急速に進み、それまでにない新職業に就く女性から「マネキンガール」「ガソリンガール」「エアガール」など多くの派生語が生まれている。なお、展示資料中のモダンガールはいわゆるモガではなく、精神的に自立した近代的な女性という意味で使われている。

17. モダン流行語辞典

麹町幸二［編］　喜多壮一郎［監修］　実業之日本社　1933(昭8)　<569-420>

昭和初期その実在をめぐり、物議をかもしたのが「ステッキガール」。「散歩の相手をする代償として料金を求める若い女」ということだが、資料にもあるように「ジャーナリズムのペン先における存在」であったようだ。しかし、ステッキガールは後に「援助交際」という新たな流行語を伴い現実の存在となる。

〇ぜいたくは敵だ

18. 昭和広告 60 年史

山川浩二［編］　講談社　1987(昭62)　<DH428-304>

戦時期には戦争標語が流行語になった。これは昭和 15 年、それまでの「日本人ならぜいたくはできないはずだ」をさらに強めた形で登場した官製の標語。東京ではいたるところにこの看板が立った。そんな状況下、看板に「素」の文字を加え「ぜいたくは素敵だ」とした悪戯があったという逸話も残っている。これも影の流行語といえる。

〇欲しがりません勝つまでは

19. 朝日新聞

朝日新聞社　1942(昭和17年11月27日付)　<Z99-5>

昭和 17 年、太平洋戦争一周年を期に公募した戦争標語の入選発表。中でも小学 5 年生の女子によるこの標語は、そのけなげさゆえか評判となった。しかし、戦後になってから彼女の父親の作であることが明らかになった。これも時代を感じさせるエピソードである。

20. 昭和ことば史 60 年

稲垣吉彦・吉沢典男［監修］　講談社　1985(昭60)　<GB511-187>

昭和期(戦後)

昭和 20 年代

〇一億総ざんげ

21. 戦後 50 年日本人の発言／上

文芸春秋［編］　文芸春秋　1995(平7)　<GB561-E77>

この「一億」という言葉は、戦時下の昭和 15 年「一億一心」という形で使われて以来、「日本人総員」という意味で長く使われていくことになる。その後「進め一億火の玉だ」「一億総ざんげ」

「一億総白痴化」…と続く。この言葉は、人口が増加した今日でもまだ使われることがある。

〇斜陽族(社用族)

22. 斜陽・人間失格

太宰治［著］　筑摩書房　1952(昭27)　<913.6-D36s3>

太宰治が死の前年(昭和 22 年)に雑誌「新潮」で発表した「斜陽」。戦後没落していく旧貴族たちを描いた同作品から「斜陽族」という流行語が生まれた。意味は小説の通り、急激な社会の変動で没落した旧上流階級層のこと。

23. 社用族の感傷

平沢清一郎［著］　学風書院　1953(昭28)　<049.1-H523s>

昭和 26 年、前年の朝鮮戦争勃発から「特需景気」を受けて日本経済は急激な復興を遂げた。そんな折に登場した「社用族」とは「社用」とかこつけ会社の接待費で役得を得る人たちのこと。「斜陽族」をもじった言葉だが、現在でも時折みかけられる。

24. 文芸春秋

文芸春秋［編］　文芸春秋　73巻4号　1995(平7)　<Z23-10>

「斜陽」という語は「斜陽産業」「斜陽業界」のように採算がとれず、傾きかけているという意味としても現在まで使われている。

昭和 30 年代

〇もはや戦後ではない
〇太陽族
〇三種の神器

25. 経済白書　昭和 31 年版

経済企画庁［編］　大蔵省印刷局　1956(昭31)　<332.1-Ke1168k>

昭和 31 年、建国以来の好景気という意味で「神武景気」と名付けられた空前の好景気に日本経済は沸いていた。そんな中、同年の経済白書から「もはや戦後ではない」という流行語が生まれた。その後は「回復を通じての成長は終わった。今後の成長は近代化によって支えられる。」と続く。

26. 太陽の季節

石原慎太郎［著］　新潮社　1956(昭31)　<913.6-I571t>

現東京都知事石原慎太郎の出世作で第34回芥川賞受賞作品。古い価値観を捨て自由奔放に生きる戦後育ちの若者たちを描いた作品は、同世代の若者の共感を呼び、その登場人物のスタイルを真似る若者たちが続出した。「太陽族」とは彼らの総称。流行語には、「族」のついたものが数多くあるが、これがそのはしり。

27. 戦後50年

中日新聞社［編］　中日新聞本社　1995(平7)　<GB561-E82>

同時期、空前の好景気を追い風に、家電消費ブームが起きた。中でもテレビ(白黒)・冷蔵庫・洗濯機は庶民のあこがれであり「三種の神器」と呼ばれた。この言葉は神武景気にあやかって造られたもの。当時はこうした建国神話の呼称が受けたようで、その他にも「岩戸景気」「いざなぎ景気」がある。

〇OL

28. 週刊女性自身

光文社［編］　光文社　6巻46号通巻255号　1963(昭38)　<Z24-23>

オリンピックを翌年にひかえた昭和38年。NHKは、それまで女子社員の呼称として使われていた「BG(ビジネスガール)」を海外で売春婦の意味もある「バーガール」と間違われる恐れがあるとして放送禁止用語とした。それに対して雑誌「女性自身」が募集した新たな呼び名の第1位が「OL(オフィスガール)」だった。

昭和40年代

〇シェー

29. 週刊少年サンデー「おそ松くん」

小学館［編］　小学館　7巻12号通巻313号　1965(昭40)　<Z32-392>

昭和40年代に入ると少年漫画の売上が急上昇し、漫画から多くの流行語が生まれるようになる。子供たちはその格好の担い手となった。草分け的存在は赤塚不二夫の「おそ松くん」から生まれた「シェー」。連載は昭和37年からだが、全国的に流行したのは昭和40年頃。独特のポーズを伴うのが特徴。

30. 読売新聞

読売新聞社　1970(昭和45年8月5日付) <Z81-19>

小学校時代の浩宮様(現皇太子)が「シェー」のポーズでおどけている珍しい写真。当時の流行の様子がうかがえる。

〇断絶

31. 断絶の時代

P.F.ドラッカー［著］　林雄二郎［訳］　ダイヤモンド社　1969(昭44) <EB98-11>

昭和 44 年にベストセラーになり、「断絶」の流行のきっかけとなった作品。ただ同書のタイトルにある「断絶」と流行語の「断絶」に意味的なつながりは全くない。

32. 断絶時代の家庭像

檜山四郎［編］　東明社　1970(昭45) <EF72-18>

流行語としての「断絶」は、年配者と若者とのジェネレーションギャップを大げさに表現したもの。それまでは、武家の「御家断絶」くらいしか用いられなかった。既存の言葉が流行語として復活した好例。

33. 検証戦後 50 年／2(事件編)

舛添要一［監修］　サンドケー出版局　1995(平7) <GB561-E74>

当時は東大安田講堂事件に象徴される学園闘争の最盛期。こうした若者たちの行動が年配者の断絶感をいっそう強めたのだろう。

昭和 50 年代

〇窓際族

34. 朝日ジャーナル

朝日新聞社［編］　朝日新聞社　21巻40号通巻1078号　1979(昭54) <Z23-7>

オイルショック後の不況から立ち直れない状況下に生まれた言葉。第一線を退き窓際で閑職に就く中高年の社員のこと。経済の低成長時代を象徴する哀感のこもった流行語。

35. 窓ぎわ族にならない秘法

岩崎隆治［著］　日本書籍　1979(昭54) <US51-448>

昭和 60 年以降

〇新人類

36. Asahi journal

朝日新聞社［編］　朝日新聞社　27巻16号通巻1368号　1985(昭60)　<Z23-7>

「新人類」の名付け親とされるのは、当時朝日ジャーナルの編集長だった筑紫哲也。展示箇所はシリーズで筑紫編集長と新人類世代の若者が対談するという企画。

〇おたく

37. 別冊宝島

JICC出版局［編］　104号　1989(平1)　<Z23-314>

アニメやゲーム等の趣味の世界に浸り、外の世界とうまくコミュニケーションできない人々。一般的な「おたく」の定義はこんなものだろう。この言葉は、90 年代に入りよく聞かれるようになったが、そのイメージはかなり悪い。その原因は、この語が 89 年の連続幼女誘拐殺人事件の事件報道をきっかけにして広まったことにある。

38. AERA

朝日新聞社［編］　朝日新聞社　8巻44号通巻397号　1995(平7)　<Z24-918>

一方、日本のアニメやゲームはその質の高さから「ジャパニメーション」などとも呼ばれ海外でも評価が極めて高い。次々と作品が輸出される中、「おたく」という言葉も「OTAKU」として欧米諸国に広まっている。対照的なのは、海外の「OTAKU」には暗いイメージが全くないこと。むしろ一種のステータスとして扱われている感もある。

〇就職氷河期

39. 就職ジャーナル

リクルート［編］　25巻11号通巻298号　1992(平2)　<Z6-494>

バブル経済の崩壊以降、年々悪くなる就職状況。そんな中、就職ジャーナルがうちだした造語が「就職氷河期」だった。就職状況はそれまでも天気に例えられることが多かったが、いきなりの氷河期の到来は、さぞ就職希望者たちを震え上がらせたことだろう。

40. 就職氷河期を勝ち抜く法

西功［著］　ごま書房　1995(平7)　<FD39-E117>

参考資料：

「流行語の昭和史」

稲垣吉彦［著］　1989　<GB511-E50>

「新語と流行語」

米川明彦［著］　1989　<KF91-E40>

◎請求記号が YDM ではじまる資料は、マイクロ資料でのご利用になりますので、展示期間中でもご利用になれます。

国立国会図書館 03-3581-2331(代)
ホームページアドレス http://www.ndl.go.jp

■国立国会図書館■□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□■03(3581)2331■